

『カズオ・イシグロを読む』

高校非常勤講師 大村賢治

- | | | |
|---|---------------|-------|
| 1 | 遠い山なみの光 | 1982年 |
| 2 | 浮世の画家 | 1986年 |
| 3 | 日の名残り | 1989年 |
| 4 | 充たされざる者 | 1995年 |
| 5 | わたしたちが孤児だったころ | 2000年 |
| 6 | わたしを離さないで | 2005年 |
| 7 | 夜想曲集 | 2009年 |
| 8 | 忘れられた巨人 | 2015年 |

1 遠い山なみの光

1982年

1 構成

第一部は第一章から第六章、第二部は第七章から第十一章で成立している。各章には行間を空けた箇所があり、段落として扱う。

第一部

第一章

1

時 場所 四月 長崎の家

事件

ニキはロンドンからわたしに会いに来て、五日間いて帰った。イギリス人の夫はニキという名に東洋的な響きがあると賛成した。わたしには下の娘になり、上に景子がいた。

時 場所 二日目

事件

ニキが景子の話を持ち出した。景子はロンドンの自室で首吊り自殺した。ニキは景子の顔をはっきり覚えていず、会うと必ずみじめな思いをした。葬式に欠席した。

2

時 場所 同じ日の晩 家

事件

わたしは長崎で暮らしていた時の知り合いの女について考えている。ニキは優しいところがあり、景子の死に責任はないと励ましに来てくれた。わたしは佐知子のことを思い出したがよくわからないところもある。夏の数週間のことだった。

3

時 場所 朝鮮戦争（一九五〇年～五三年） 市の東部にあたる地区コンクリート住宅

事件

わたしは夫とコンクリート住宅に住んでいた。住人達はわたしたちのような若夫婦で会社の社宅だった。夫は景気のいい会社に勤めていた。

時 場所 木造の家一軒

事件

窓から見えるこの家をよく眺めていた。

時 場所 夏になる頃

事件

わたしは妊娠三ヶ月か四ヶ月だった。白塗りの傷だらけの大きなアメリカ車が川に向かって走っていくのを見た。

時 場所 ある日の午後 佐知子の噂話

事件

女はとっつき悪い三十才。女の子はナオ。東京言葉で長崎の出ではない。佐知子と万里子だ。

時 場所 その夏 ある日

事件

わたしと佐知子は親しくしており、彼女に完全に信頼される。わたしは、万里子がこの二人の子と喧嘩していたと報せた。学校へ行った様子もなく、ずる休みしているといけなと告げる。顔に怪我をしていた。川にも危ない所があると話す。佐知子は礼を言い、立派なお母さんになると言う。

時 場所 土手

事件

しゃがんでいる万里子に声をかける。彼女は学校へ行かないと言い用心深くじっと見ている。その次に口をきいたのは二週間以上たってからだ。

4

時 場所 木造の家

事件

家の中はきちんと片づいていたが、全体は陰気くさかった。万里子は寝ころがっていた。大きな猫をなでていて、子猫が生まれるといった。

万里子は川向こうのおばさんが家へ連れて行ったと言う。佐知子は長崎に来て一年町の反対側の方にいる。伯父の所に同居していたと言う。金に困っている。貸してくれと頼まれ引き受ける。仕事を求めているうどん屋に話をつけてくれと頼む。夏休みなので万里子のことは心配ないと言う。

わたしは、みずぼらしい家に高級品らしい茶器に茶を出す取り合わせに異様な印象を受ける。これは伯父の家から持ってきたと白状する。万里子のおばさんの話は作り話だという。

第二章

1

時 場所 藤原の家 繁華街の様子

事件

藤原は母の親友の一人で心の暖かな人だ。佐知子は働きだしていた。藤原はわたしのお腹にさわり大事にしないといけないと言った。幸せのことを考えること、子供を育てるには積極的な生き方をすることと助言する。

時 場所 表の日向 小さな女の子

事件

わたしと藤原は万里子に声をかける。彼女はテーブルに座った。藤原はお客さんにあんなこと言わないで、失礼だと注意する。万里子は手を見つめている。

時 場所 調理場入り口

事件

佐知子が出て来た。ずっと老けているのに驚いた。藤原が万里子にお母さんに仕事を教えてもらうのよと言ってちらりと佐知子の方を見た時、二人が交わした視線に冷たいものを感じた。

時 場所 テーブル

事件

佐知子は、うどん屋で働くのって面白い、万里子は面白くないと言う。万里子はあの女が来て家へ連れて行くと言ったと言う。佐知子は調理場へ来いと言うが万里子は動かない。佐知子は調理場に消えた。

2

時 場所 夏 アパート

事件

緒方が泊まりに来た。

時 場所 その年の初め

事件

緒方は長崎を離れた。夫の父で、わたしも同じ姓になった。夫二郎の父だ。二郎と会うずっと前からのつきあいだ。二郎は身なりにうるさくいつも前かがみだ。緒方は胸を張って座り、のびのびと鷹揚な雰囲気があった。

時 場所 幾日か後 朝食

事件

緒方が、二郎の同窓会に松田が来るか尋ねるとどうかと答える。二郎は来た日に忙しくなった。そのうち休暇を取ると言う。松田とは卒業後すっかり方向が違ったと答える。

緒方は若かった頃は恩師を招いた、このごろは教えを受けた人を忘れると批判する。松田重夫は緒方が職を失ったのは当然だと言っている。悦子と二郎は同調する。

時 場所 台所 二、三分

事件

出かける緒方の弁当を作りがてら子の名前の話になる。悦子は男の子は緒方の誠二、女の子は緒方の亡き妻景子にしようと言う。

3

時 場所 その晩 夕食

事件

緒方は帰ってから新聞ばかり読んでいる。悦子がもてなしに満足か気にすると二郎は不満はない、忙しい時に来たと言う。

4

時 場所 晩

事件

佐知子が万里子を探しに来る。悦子が一緒に行くと言うと、二郎は暗い、緒方は気をつけろと言う。二人は階段を下りて行った。佐知子は二、三日うちにアメリカへ行くと言う。遊び場、アパートの回りを探す。

佐知子はなぜ行くか、誰と行くか聞かないのに不満を表す。隠し事はない、恥ずかしいとも思っていないと言う。

時 場所 木造の家

事件

悦子は裏側を見といたほうがいいと言い、佐知子は林？と少し震える声で言う。

時 場所 家の中 真っ暗

事件

佐知子は座敷に上がり万里子の名を呼ぶ。玄関に戻り、向こう岸へ行った方がいいと言
う。

時 場所 木の橋

事件

佐知子はバーへ行った。二人きりの小さな部屋に入れてくれた。

時 場所 向こう岸

事件

悦子は行ったのは初めてだった。虫の知らせか林へ急いだ。

時 場所 土手の下手 川っぶち

事件

草の上に荷物のようなものが転がっていた。佐知子はじっと佇んだままそれを見ていた。
万里子だった。目は奇妙な表情をたたえていた。

第三章

1

時 場所 暗い中 土手の下手

事件

転がっているものを二人で見た時不気味な気持ちがあった。二人そろって走り出した。万
里子は身をかがめ膝を曲げ背中を向けて横に倒れていた。彼女はうつろな表情で二人を見
上げた。佐知子は子供の頭を支えた。万里子は腿の内側に傷があった。

時 場所 木造の家

事件

佐知子は万里子を風呂場へ連れて行った。悦子は火鉢で火をおこした。怪我は木から落ちたせいだ。悦子が今夜は誰も来ないか聞くと佐知子は手を焼かせようとする嘘だと言う。

時 場所 蚊

事件

佐知子はすぐ日本を発つと言う。フランクと英語で話している。アメリカへ行けばアメリカ人のように話せる、心配ないと言う。

時 場所 子猫二匹

事件

万里子のことを心配すると大丈夫だと言う。万里子は頭がいい、父親は教養のある人だ。伯父の家にいた時筋の通った返事ができ、学校でもできる子供と付き合い、家庭教師もついていたと言う。引越しばかりして学校へ行けない時もあった。戦争で父親が死に不幸になった。東京を離れる必要はなかったが伯父の家に厄介になった。万里子はアメリカへ行っても大丈夫、勤めることもできる。佐知子は子猫から目を離さない。二、三日のうちにフランクが車で迎えに来る。

2

時 場所 前の日 公園

事件

悦子は小さい女の子の夢をこの二、三日見た。

時 場所 ニキが来て三日目

事件

二人で村まで散歩に出た。

時 場所 イングランド北部の農業地帯

事件

悦子はそこまで行く勇気がなかったがこの辺りの小道は気に入っていた。

時 場所 ティールーム

事件

小さな女の子を見て、悦子に結婚して子供が生まれるかもしれないと言うとニキは子供は一番嫌いだと答える。

ニキが十九才の友達が子供を生んだという噂を聞いて結婚しているかと聞く。ニキはそんなこと関係ないと言う。

時 場所 テレビ

事件

悦子がテレビで見た映画の話をする。ニキは見ていない。くだらないものを見ていると言う。

3

時 場所 ティールームを出る 小さな鉄道の駅

事件

ウォーターズ先生に呼びとめられる。近所の人で何年か前まで二人がピアノを習っていた。景子は何年もニキは一年位だった。大したこともないピアニストで優しい人だった。ニキと景子の近況を聞く。景子が家を出てから何年も必ずしつこく聞かれた。

時 場所 家

事件

二人は景子の話しをする。景子は二郎の葬式に来なかった。生活に入って来ようとしなかった。

時 場所 四日目

事件

ニキは景子の部屋が向かいにあると妙な気持ちになると部屋を変える。景子はここを出て六年たつが不可解な妖気が漂っている感じがする。家を出るまで二、三年間閉じこもった。居間へ降りて来ると必ずニキが二郎と喧嘩になった。

時 場所 マンチェスターの部屋

事件

景子は首吊り自殺し、家主の夫人に発見された。悦子は見ずじまいだった。悦子は公園の小さな女の子の夢よりもその前の二日間に思い出して佐知子に関係があると疑っていた。

第四章

1

時 場所 ある日の夕方 台所

事件

悦子が夕食の支度をしているとヴァイオリンの音がした。

時 場所 茶の間 扇風機

事件

緒方は将棋盤にかがみこんでいた。夕べの勝敗はつかなかった。悦子に弾いてくれと頼むが弾けないと断る。棚にあるのを見つけて弾いたことを思い出した。

2

時 場所 その晩 夕食後

事件

二人は将棋をさす。悦子は食器を片付け縫物をする。緒方は若い連中は思想・理論に押

し流されている。松田重夫は右手にペン左手に共産主義の本を持って書いていると批判する。次郎は相槌を打つ。

時 場所 ドア ノックの音

事件

二郎の会社の同僚が二人酒を飲んで赤い顔をしている。入ると緒方を紹介する。会社で二郎は暴君で通っていると話す。一人が夫の党に妻が投票しないとゴルフクラブで殴ると言う話をする。妻が自分の叔父に顔が似ている人に入れるという話をする。三人は政治の話をして会社の人々の噂話をする。

3

時 場所 客は一時間で帰る。

事件

緒方は将棋の続きを促すが二郎は疲れたと断る。夫婦が別々の党に投票したことに驚く。二、三年前なら考えられない。これが民主主義というものか、アメリカに学んだもの全ていいとは限らない。細君が信頼できないという情けない話だと言う。次郎は同意する。二郎はアメリカが持って来たものも悪いものばかりではないと言い添える。

緒方は規律、忠誠心、義務感を称える。子供の教育に一生を捧げて来たと話す。二郎は日本の制度にも欠陥はあったと反撃する。日本は神の国だなんて教えられたと批判する。緒方は子供達に国に同胞に正しい姿勢を身につけるように身を捧げてきたと話す。

第五章

1

時 場所 アパート その朝

事件

フランクがホテルからいなくなったと佐知子は告げる。東京で知り合った彼とは東京で

も同じことがあったと言う。長崎まで来てくれた。探しに行くと言う。悦子は帰ってくるまで万里子を預かると言う。今夜二、三時間そうしてほしいと頼む。金を融通してほしいとも頼む。

時 場所 寝室

事件

悦子は筆筒の引き出しから封筒を取り出し風呂敷きに包む。

時 場所 茶の間

事件

風呂敷包みをそばに置いても見向きもしない。フランクは日本語がひどいので二人は英語で話す。父は英語が上手だった、英語を勉強しろと言った。結婚すると夫にやめさせられた。手をのばして風呂敷包みを持ち、あらためもせずハンドバックにしまった。長崎が悲惨だったことは知っている。東京もひどかった。

時 場所 終戦の頃 防空壕 焼跡のビル

事件

東京は瓦礫ばかり、嫌なものを見た。万里子もそうだった。五つで喉を切った女を見た。いつでもこの女のことしか思い出せない。

時 場所 古いビル

事件

寝返りしていた。起き上がって万里子は女の人が立ってこっちを見ていたと言った。彼女が生まれた頃は大変だった。あんな時に結婚するのはバカだった。戦争になることは分かっていたのだから。戦争がどんなものか分かっていた人は一人もいなかった。名家に嫁いだ。戦争でこんなに世の中が変わるなんて思わなかった。

時 場所 うどん屋 昼食 三和土の椅子

事件

藤原の息子和夫の話をする。道子と三年の結婚期間があって別れた。悦子は中村とのことが緒方に引き取ってもらえて助かり二郎とめぐり合えた。中村とは何もなかった。何も決まっていなかった。子供さえ生まれれば幸せになる、すばらしいお母さんになると励ます。

時 場所 木造の家 暗い提灯一つ

事件

万里子は蜘蛛を見つめている。悦子が注意しても聞かない。持って来た縫物にかかった。万里子は子供と遊んでいる。友達と遊ばない。窓ぎわへ行き闇を見つめ外へ行きたいと言う。またあの女が来るかも知れないから悦子を頼んだと言う。フランクを悪い人と言う。東京で飼っていた猫は連れて来るつもりだったが前の日にいなくなった。万里子はいなくなった。

第六章

1

時 場所 あの晩

事件

万里子を見つけるのにどれだけ時間がかかったか思い出せない。古い縄を草の間を引きずっていた。万里子は膝をかかえて座っていた。子猫を飼ってくれる家を見つけなくてはならない。そうでないと川に捨てられる。万里子は闇の中へ駆け出した。

2

時 場所 玄関

事件

佐知子の怒鳴っている声が聞こえる。部屋の真ん中で向かい合って立っている。

時 場所 提灯の明かり

事件

佐知子が迷惑をかけたと言うと悦子は外へ飛び出したと答える。謝らせようとするが話にならない。フランクの悪口を言って闇の中へ消えた。

時 場所 火鉢

事件

友達は見つかったか問うと見つかった、今夜は来てくれて助かったという。伯父と戻れないか話し合ってみよう。外国へ行くのは娘も不安だったと思う。フランクは万里子が恐い。ホテルのメイドもした。あと二、三週間で行けるところまできた。何週間も床掃除をした。その金をバーの女とくっついて三日で飲んでしまった。

3

時 場所 六年前

事件

景子が家を出た時、わたしとのつながりが切れると判断した。激しく反対したのも守ってやりたいからだった。

時 場所 その日の朝 ニキが来て五日目

事件

思い出したのはマンチェスターの部屋のドアを景子の下宿の女主人が開けた時の様子だった。起き上がって景子の部屋のドアを開けた。寒々としていた。

4

時 場所 台所 朝食

事件

ニキは悦子の話をしたら、それを詩にするという友達がいると言う。

時 場所 霧雨

事件

ニキは父と母が日本を出た事情を話したら感心したと言う。子供と夫に縛られてみじめな人生を送っている女が多すぎると批判する。母が自分の人生に判断を下したことを誇りにすると言う。

夫は日本について論説は書いているが、日本文化の性格は分かっていない。二郎は家族のために一所懸命働いた。誠実だった。娘と暮らした七年間はいい父だった。景子が父との別れを悲しまないとは考えられなかった。日本を捨てたのは間違いなかった。景子の事が心配だ。

5

時 場所 鉢植えの剪定

事件

ニキは父が新聞に書いた記事を全部読むと言い出した。引き出しや本棚を片っ端からかきまわしていた。池に行き餌をまきトマトの手入れをする。

トマトをモリソンにあげると言うと言った一家の話になる。モリソンは銀行に勤め、マリリンは結婚した。ニキは何もかも忘れ新聞を読んでいる。声をかけても応答しない。自分の私生活を守ろうとする。

二人の娘は夫は正反対と言い、悦子はよく似ていると思う。景子の生活は父親譲りだ。夫は幼い頃の景子を知らない。二人の娘は癩癩持ち、執着心が強く、怒ると一日中機嫌が悪かった。一人は自殺し一人は明るく自信のある女になった。その責任を夫は性格に帰したり二郎に求めたりした。

第二部

第七章

1

時 場所 夏 アパートの回りの空地 虫

事件

空地を歩いて佐知子の家まで出かけて行った。子供が生まれる不安、緒方が来ていたこともあってこの夏の記憶ははっきりしていた。

時 場所 晴れている日 ほの白い山々

事件

うつろな午後の長さも忘れた。

時 場所 新聞 間もなく占領が終わる

事件

長崎に子供殺しの事件が起こった。男の子、小さな女の子、幼女が殺され、夕方になると子供の姿が見られなくなった。佐知子は万里子を放っておくことが少なくなった。

時 場所 伯父

事件

伯父は帰って来てもいいと手紙をくれた。彼は夫の親戚で数日前まで会ったこともない。裕福で大きな家に娘と女中一人と三人で住んでいる。娘は佐知子と同年の未婚だ。佐知子は引っ越しの準備もしたい。

時 場所 その朝 八月半ば 晴 橋の上

事件

佐知子は従姉靖子とはやり合っただけだ、子供のため色んな途を考えている。伯父の所へ戻るのが一番だと話す。

時 場所 ある暑い午後 稲佐行き

事件

佐知子が越す前に一日遊びに行こうと誘い稲佐山へ行くことになる。

2

時 場所 午後 フェリー 稲佐

事件

母子連ればかりだった。

時 場所 ケーブルカー 木造のプラットフォーム

事件

頂上までケーブルカーに乗る。佐知子親子が切符を買いに行った。悦子は売店で双眼鏡を買った。佐知子はアメリカ婦人と流暢な英語で話していた。もう一人は日本人婦人で男の子を連れていた。万里子は双眼鏡を眺めている。男の子が見せてくれと言うと冷ややかに相手を見た。

時 場所 ケーブルカー動く

事件

山腹が足下に見え、目の下に急斜面が見える。

時 場所 上の駅 木のテーブル

事件

日本人婦人は友達を案内している。連れの人英語が上手だと言う。佐知子はアメリカ婦人と英語で話している。

万里子は首から外し双眼鏡を渡した。男の子は見えない。ぼくのとは比べものにならないと言う。

3

時 場所 山道 ジグザグ

事件

上に向かって休みながら登って行った。万里子は後になり、駆け出して追い抜き先に立つ。

時 場所 一時間後

事件

佐知子はアメリカ婦人と会ってから口数少なく沈んでいる。父は尊敬されていた。外国人の親戚があるので縁談までこわれかけたと話す。

時 場所 曲がり 登り

事件

今では別の時代みたいと言い、何もかもすっかり変わったと言う。父は外国へ出かけていた。アメリカへ行く夢を見ていた。父は英語を勉強すれば仕事を持った女になれると言った。結婚したら夫に英語の勉強を禁じられ本も捨てさせられたと言う。夫は名門で厳格で愛国者で思いやりがなかった。

時 場所 四角い広場

事件

佐知子は腰を下ろした。万里子は絶壁に立って双眼鏡を見ている。佐知子は注意する。

時 場所 港の風景 対岸は長崎

事件

あの辺りはみんな原爆でめちゃめちゃになった。それが生き生きと活気があると悦子は言い佐知子はうなづく。

悦子は幸せになると思う。藤原は将来に希望を持たなくてはいけないと言う。子供が五人いた。夫は長崎の偉い人だった。原爆が落ち長男以外亡くなったが頑張っていると言う。佐知子は戦争でめちゃくちゃになったが娘がいるので将来に希望を持とうと答える。

母親になって始めて生きがいができる。伯父の家の生活が退屈でも娘の幸せが大切だと言う。万里子は子猫が飼えるかもしれないと真剣な表情をする。

4

時 場所 夕方 ケーブルカーを降りた空地

事件

テーブルに腰を下ろし、おやつにした。万里子はスケッチブックに絵を描き始める。男の子が覗き込む。絵は易しいと言う。母親は万里子を褒める。男の子はこの船は大き過ぎると言う。母親は有名な絵の先生についていると言う。男の子は九九を知っていると言う。

悦子が何になりたいと聞くと三菱の社長と答える。母親は夫の会社で今から決めていると言う。万里子は尋ねられると動物園の園長と答える。男の子はひるみふくれっ面でベンチに腰かけた。

時 場所 木登り

事件

万里子は枝から枝へ登って行く。母親は心配する。佐知子はにっこり笑い愛想がよくなる。

男の子が木の幹に足をかけようとする、万里子は降りて来て手を踏みつけた。男の子は悲鳴を上げてぶざまに落ちた。母親はくだらないことをすると叱った。

5

時 場所 夕方 長崎 夜の光

事件

稲佐を発ち、浜屋デパートの食堂で夕食をすませた。

時 場所 夏の夕暮れ くじ引きの屋台

事件

万里子がくじ引きをしてみたいと言うので悦子は小銭をあげる。植木鉢を当てる。もう一度引くと鉛筆が当たり機嫌が悪い。三度目にバスケットではないが一等賞の木の箱を当てる。佐知子は笑いだして拍手した。万里子は東京でも一等を当てた。この箱は子猫を入れて行こうと言う。

6

時 場所 電車の中

事件

二人は楽しかった。また行こうと話す。万里子は外をじっと見ていた。

時 場所 ある停留所

事件

佐知子は出口のあたりを見ている。一人の女が万里子を見ていた。女は佐知子の視線に気づくと顔をそむけた。女は降りた。佐知子は人違いと言う。

第八章

1

時 場所 あの夏

事件

緒方がいつまでもいた訳は松田重夫の論文について、二郎がどう対応するか見抜いていたからだ。二郎は福岡へ帰って何もなかったことにしてしまう時を待っていた。厄介な問題が持ち上がった時よく使う手だ。

時 場所 あの夜

事件

松田重夫について二郎に洗いざらい言ってやりたかった。父親に対する態度ははっきりさせておくべきだった。夫婦の問題はそういうことを口にだして話し合うものではなかった。

時 場所 その翌日

事件

緒方は一日中アパートにいて将棋盤をにらんでいた。

時 場所 夕飯後

事件

緒方は明日は大事な日と言うと二郎は昇進する保証はないと言う。成功を祈っている。将棋の勝負をつけようと言うと緒方の勝ちだと言う。緒方は初めの二、三手は先を考えついていたが、わたしが勝ったとたん投げている。完全な敗北主義者だ。小さい時からそういうところはあったと言う。最初の作戦が挫折するとすぐ投げってしまう。九つの時と同じだ。自分の思い通りにならないと手がつけれなくなる。二郎は新聞を放り出し、将棋盤をひっくり返そうとしたが急須を足でひっくり返し新聞を持って何も言わずに出て行った。悦子はエプロンの端でお茶をふいた。

2

時 場所 朝食

事件

二郎は朝刊を見ながら朝食を食べる。うまくいくといいと言うと、大騒ぎすることではないと答える。黒いシルクのネクタイと言うと、使うと思ってアイロンをかけておいたのになかったと言う。戻してあると言うとこれでいいと言う。

緒方の部屋の襖に注意していうと何をしていると湯飲み茶碗を突き出す。急いで飲み新聞に目を走らせる。

時 場所 緒方の部屋

事件

緒方が起きてきて食事をする。福岡へ帰ったら片付けなくてはいけない仕事がある。秋

には菊子夫婦が来るだろう。渡辺はいばって二人だけの暮らしを許さない。福岡の家は気に入っている。長崎の家に門の所につつじを植えた。咲いた頃に二人は引越した。広過ぎた。

3

時 場所 市電で市内へ 美術館 原爆記念碑 「平和公園」

事件

公園の装飾を最小限におさえてある。一種荘厳な雰囲気が漂っていた。緒方の誘いで長崎見物に出かけた。

時 場所 あの日の朝 絵葉書の一件

事件

緒方がは福岡で夕食を近くの小さな食堂で食べている。その老婆に絵葉書を出そうとしている。

時 場所 うどん屋 中川町

事件

藤原は緒方の昔の家の近くでうどん屋をやっていると悦子は言う。緒方は藤原は偉い人だったが今では妻がうどん屋をやっているのか、行くと気まずい思いをさせると言う。

悦子は誇りを持って仕事をしている、食事をすれば喜ぶと誘う。緒方は中川へは行ってみようと思っていた。松田重夫を尋ねてみる。それからうどん屋に行く決める。

4

時 場所 正午 中川

事件

緒方は感慨に耽っている。大して変わっていない。

時 場所 緒方の旧居 悦子が両親と住んでいた家

事件

緒方はそこを通らない。

時 場所 互屋根の大きな立派な古い家

事件

緒方はあれは松田の家だ、父親をよく知っていた。母親はまだここに暮らしている筈だと言う。

時 場所 松田の家

事件

眼鏡をかけたやせた若い男が出て来た。ワイシャツを着小さな鞆をかかえている。松田重夫は昔二、三度会ったことがある。もっとやせて若々しくなっていた。

第九章

1

時 場所 松田の家

事件

松田は思いがけず会えた。悦子にまでと言って二人の手を握った。お茶くらいと言うのに、仕事の邪魔になってはいけないと断る。緒方は本の論文を読んで驚いたと言う。松田は時代が変わって緒方が偉かった頃とは違うと言う。緒方は松田を校長に紹介したと言う。松田は自分の目で見、疑いを持つことを教えられたかった。日本は史上最大の不幸に突入したと言う。緒方は敵の猿真似をすればいいのではない、兵器が不足して負けた。国を思い価値あるものを守り次の時代に伝えようとしたと言う。松田は将来が読めた人は投獄された、その人達が釈放され夜明けを教えたと言う。

時 場所 坂道 木の橋

事件

悦子はくだらないことを言う、見下げた話だ。気にしないほうがいいと緒方に言う。

2

時 場所 うどん屋

事件

藤原は久しぶりで嬉しいと言う。この町で仕事が長かったと言うと育った土地へ帰りた
いと答える。修一の学校の校長をしていた頃を思い出す。修一は恐かったと言うと勉強家
でよくできたとほめる。

時 場所 調理場

事件

藤原は皿を片付け調理場に消えた。すぐ戻って来て和夫は元気で自動車会社に勤めてい
ると言い、前には二度と結婚しないと書いていたが将来のことを考え、相手はいないが希
望を持つようになったと言う。緒方は若い女性はわがままで洗濯機などの話ばかりしてい
ると言う。藤原は二本の手があるのになぜ洗濯機かと思ったという。

二郎はすっかり偉くなり昇進するらしいと答える。働き者だった。和夫も今でも夜中ま
で書類を読んでいる。

3

時 場所 帰宅

事件

帰ると二郎が一時間早く帰って来た。明るい声で父親に挨拶した。夕べの痲癩など忘れ
たところを見せたいのだ。どうだったと聞くとまあまあと答える。

代表に合意書にサインさせたと言う。緒方はよかったと悦子をちらっと見視線を二郎に
戻す。おめでとうと言うとそんなところに立ってないでお茶くらい入れてくれたらと言う。

時 場所 その晩

事件

二郎の成功のお祝いにいつもよりご馳走をつくった。明日帰ると言うとなんかおかまいもしなかったと言う。少し暇ができると言うのにもう一週間いたらと言うと二郎は箸を止める。嬉しいが帰らないと言う。二人はしばらく何も言わず食べ続けた。

時 場所 食器棚

事件

酒の瓶と盃を二つ出して来た。お前の前途のために、お父さんのこれからにと二人は完敗した。

4

時 場所 アパート

記憶はあてにならない。事情次第で変わってしまう。

時 場所 あの日の午後

事件

木からぶら下げられていた小さな女の子の悲劇は連続幼児殺人事件以上に悲惨なものだった。

時 場所 稲佐行き一、二日後 夕方

事件

アパートの窓から外を眺めた。アメリカ製大型車がアパートのコンクリートに乗り上げた。二人乗っていた。周囲を回って消えた。白い大型車が現れた意味を考える。

時 場所 一時間後

事件

人影が空地を横切って佐知子の家のほうへ歩いて行く。女だった。中へ入ったようだった。アパートを出た。

時 場所 家の中

事件

人声がするのにギョッとした。一人は万里子だった。

時 場所 玄関

事件

近づいても言葉まで聞き取れない。じっとしていた。引き戸を開けて声をかけた。話し声が止んだ。中へ入った。

第十章

1

時 場所 木造の家 家の中はひんやりと暗い感じ

事件

年取った女が座っていて万里子が向かい合っている。顔がやや白っぽく色が悪い。七十前後で黒っぽく地味な着物を着ている。

この家の者がどこへ行ったか分からない、子供一人放り出して行った。川田靖子と名乗る。佐知子の従姉だ。聞いていて悦子のことを知っていた。移って来てくれるのを二人で待っていた。三週間前後には移って来る筈だった。悦子はいつでも越せるように支度していたと言った。二人がアメリカの友達のことを知らないとは悦子は考えたこともなかった。二人はいなくなって淋しがっていた。戻ってくればみんなのためにいい。万里子の頭を軽く撫でる。万里子はすぐに行く、母に話すと言う。

2

時 場所 木造の家

事件

その日をもう一度訪ねて行くと、ここにいるとは思わなかつたらうと佐知子は言った。

時 場所 座敷 衣類 毛布 着物二着 白い茶碗セット

事件

いろいろなものが座敷中に散らかっている。万里子のそばで二匹の子猫がじゃれあい、万里子は三匹目を両手で抱いている。佐知子は明日神戸へ発つと言う。そこからアメリカへ行く。フランクが手配した。今度は裏切らない。伯父が来ないかと言ってくれるのはありがたいがみじめな生活はお別れだ。

万里子が猫を飼ってもいいと言ったと言うとそんな話をしている暇はないあの時とは変わったと言う。佐知子は子猫を一匹ずつ箱に入れる。

時 場所 玄関

事件

佐知子は箱を持ちここにいろと言う。万里子を見たが姿を消した。

時 場所 川岸

事件

佐知子は足下に箱を置いて川岸に立っている。子猫を水につけたがまだ生きている。子猫を箱に放りこみ戸を閉めた。

時 場所 本箱

事件

中央に流れ、持ち上がって沈んだ。下流に流され始めた。万里子は流れていく箱を見つめ走り出した。五十メートル先まで行って川を見ていた。

3

時 場所 木造の家

事件

佐知子は提灯に火をいれてつるした。すぐ帰ってくると座った。

時 場所 座敷

事件

佐知子はまた荷造りを始めた。神戸に着いてからどうするか聞くと彼は貨物船の仕事があつてアメリカへ行く。お金を送ってくれて私達も向こうへ行く。ここを離れるのは嬉しいと言う。万里子も幸せになる、会社に勤め画家になる、日本では女はダメだと言う。アメリカへ行けないかもしれない。行っても大変ということも半分分かつている。伯父の家では何もない。

時 場所 提灯

事件

悦子が万里子を探しに行くと言うと提灯を持って行ったほうがいいと言う。

時 場所 橋 手すり

事件

万里子は向こう側の手すりにうずくまっていた。声をかけると、行きたくない、あの男も嫌いと言う。お父さんのような人かもしれない、いいかどうかまず行ってみたらと声をかける。

万里子は悦子を見て走り出す。家に向かって土手を走って行った。

時 場所 川の上 半月

事件

悦子は橋の上に佇んだ。月を見ていた。

第十一章

1

時 場所 二階建ての家

事件

悦子は誰かがベッドのそばを通過してドアを閉めて出て行ったと思った。

時 場所 隣室

事件

ニキが立てた音だった。よく眠れないと言っていた。

時 場所 廊下薄暗い 廊下の外れの景子の部屋

事件

音が聞こえた気がした。ドアに向かって歩き出した。

時 場所 廊下の台所の音

事件

階段を降り始めた。出て来たニキはびっくりした。

時 場所 五時

事件

悦子は台所入ってコーヒーを入れニキの所へ行った。ニキは庭を眺めていた。

時 場所 暖炉

事件

ニキはパパは姉さんのことを考えてあげるべきだった。相手にしなかったと非難する。自分の子ではなかった。こっちに来て幸せになれないと思っていたがそれでも連れて来る決心をしたと言う。

時 場所 二、三日 ニキに電話

事件

ニキは今日の午後に帰らなくてはならないと言うと、よく来てくれた、自分の生活があると言う。悦子のことを詩に書いている友人が、写真か何かもらってきてと言っている。いい友達がいて安心すると言う。

2

時 場所 ニキが使っていた空き部屋

事件

役に立つかとカレンダーを渡すとそれでいいと言った。ロンドンで暮らすのかと聞くとあっちはいいと答える。デヴィッドとの結婚を聞くと結婚に意味はない。女はもっと自覚すべきと答える。他に大したことがあるわけではないと言い返す。

3

時 場所 発つのは昼食の後 果樹園

事件

散歩に出る。どこにいと聞かれたらロンドンと、どう暮らしていると聞かれたら友達と暮らしていると答えると悦子は言った。ニキのことを恥ずかしいとは思っていない。義父は妻を亡くし一人で一緒にいてくれて幸せだった。義父が好きだった。カレンダーは長崎の港の風景で一度遊びに行った所だ。あの時は景子も幸せだった。ニキの父が初めてここへ連れて来てくれた時何もかもイギリスらしいと思った。

2 舞台

夏の数週間を中心としている。敗戦の前十年後くらいの間、長崎とロンドンに展開する。

3 人物

(1) 緒方誠二

息子二郎、娘菊子の二人の子がいる。緒方は胸を張り鷹揚で堂々としている。二郎とは親子なのに似ていない。その年の初めに長崎を離れた。夏に二郎のアパートにやってきた。妻景子は亡くなっている。

福岡出身で長崎で高校教師をし、校長になった。戦前の封建思想、上下の人間関係、男尊女卑の下に育ち信じそう生きてきた。それが敗戦で民主主義思想、自由平等に大転換す

る中に生きることになる。新しい思想に対抗して自分を守ろうとした。

若い頃は同級会に恩師を招いた、この頃の連中は教えを受けた人のことを簡単に忘れると嘆く。図書館で見つけた雑誌に教え子松田茂夫が同僚と自分のことを批判していると憤る。栗山高校に紹介してやったのに恩を忘れていると憤る。謝らせたいと思う。松田は共産党に入ったのかと思う。若い連中は思想・理論に押し流される。松田は自分でしていることの意味を考えていない。

緒方はどうしても松田に一言いいたかった。昼休みに家に行く。彼は二人に愛想良く挨拶する。二人の手を握る。緒方は論文に書いたことを信じるのかと問う。松田はこの二、三年で何もかも変わった、時代が変わって前とは違うと答える。校長に紹介したが、別の時代の話かと詰め寄る。

松田は子供たちは恐るべきことを教わった。危険な嘘を教えられた。自分の目で見疑いを持つことを教えられなかった。日本は史上最大の不幸に突入したと言う。

緒方は負けたのは兵器が足りなかったからで、臆病だったからでも浅薄だったからでもない。心から国の事を思って価値あるものを守り次の時代に伝えるようにしたと言う。松田は誠実な努力は疑わない、方向が間違っていたと言う。将来が読めた人はほとんどいなかった。認められた人は投獄された。そういう人達が今新しい夜明けを教えていると言う。

緒方は我々の努力や成果がどうして君に分かるかと言う。松田は緒方の仕事のある面も知っている。一九三六年四月の教師五人が餓になって投獄されたと言う。

松田は戦前と戦後の教育を知っている。戦後の正当性に立っている。戦前の誇りを指摘している。その人達を批判してはいない。

緒方は戦前の思想に戦後も生きている。あれは正しかった。その社会で誠実に努力した。それは個人的な理解だ。思想として理解しているのではない。戦前も戦後も人は目の前のことに全力を尽くしている。緒方は個人的に過去を正当化する。自分の思想を確信してい

たと言う。対立的思想にある今を把握できない。五人の教師が馘になり投獄されたのは緒方が密告したからだ。正しいと思い密告した今も正しいと思っている。これが緒方だ。

戦前と戦後の思想的大転換期について、本作品では登場人物を通して描いている。川端康成は作品によって描いている。

二郎の同僚が来て選挙の話になる。妻が夫の言う通り投票しないとゴルフクラブで殴ると言う。一人は投票は彼女自身の権利だと言うがそうではない話になっている。

緒方は別々の党に投票するなど二、三年前から考えられない。これが民主主義で、アメリカから学んだものが全ていいとは限らないと思う。

別々に投票するのは妻が信頼できないと言うのは情けない話と言う。妻は家を守ることが分かっていない。自分の務めも忘れていると言う。日本は規律・忠誠心でまとまっていた。国、家族、目上の人に義務を守っていた。今まで制度を作り上げ大事にして来た。日本の学校の伝統は今めっちゃめっちゃだ。自分は子供の教育に国や同胞に正しい姿勢を身につけるようにと一生を捧げて来た。今は躰は教えていないと言う。

妻が夫の支持政党に投票しないなどとんでもないことだ。封建思想の下で生きてきた緒方はその考えを基に生きている。反する民主主義思想の現れは否定する。これまでの自分を正当化し今を生きる。

緒方は悦子と話が合う。家が近く、おそらく教え子だった悦子と二郎は結ばれる。二郎は悦子に指示し茶飲み話などほとんどしない。むしろ緒方のほうが親しく話す。悦子は二郎より緒方のほうと親しく接しやり取りがある。父のような義父だ。二人の関係に二郎は入れない。入ろうともしない。除外されている。二郎と悦子の夫婦関係は離反している。川端康成の小説『山の音』の舅と嫁の関係に似ている。

競争に勝って来た二郎の昇進を喜んでいる。が、他のものにその地位を奪われるかもしれない。二郎には出世を願い続ける。

将棋が好きで子供のころから二郎に教えてきた。今も一緒にさそうとしたがる。仕事から帰ると誘う。さすのを楽しみにして帰りを待っている。二郎は乗り気ではない。疲れていて新聞に気をとらわれている。二郎が先を読まずすぐ投げ出すところは子供の頃のままだ。敗北主義者だと言う。子供の頃の癖は今も続いている。子供のままだと思う。一所懸命努力し、勉強をし、出世した。その点では自慢の息子だ。

娘の菊子は舅と暮している。その生活は大変だと思う。二郎夫婦は家を出て別に暮らした。これは昔なら批判された暮らし方だ。緒方はこの生活はよかったと思い菊子達は不幸だと思う。

平和公園で絵葉書を書く。相手は福岡で小さな食堂をやっている老婆だ。夕食を食べに行き親しくなった人だ。緒方には思いやりがある。

緒方はうどん屋を尋ねる。昔からの知り合いで再会を喜ぶ。二人で子供の自慢話をしあう。藤原は昔活躍した有名な人だった。その妻は今うどん屋をやっている。緒方は行けば気まずい思いをさせる、恥をかかせると言う。藤原の没落と自分の成功を対照させる。昔抱いた劣等感を相手に抱かせると思う。地位、身分で人を判断する姿勢がここにはある。

緒方は封建思想の下で誠実に真剣に真面目に生きた。努力し出世し校長になった。すべて正しかった。が、敗戦で何もかもが変わった。その一つ一つに元のままの自分で直接に対処していく。状況をまともに生きてきてそのまま生きようとした。自分を自分の実態を正当化し新しい事態に向き合った。表層的に生き表層に対処した。一つ一つ否定する。否定して自説を陳述する。生き方は正しかった。確かにそれはそれで正しかった。その判断を現実に向ける。戦前の日常を、信じる間違いのない日常をそのまま戦後に生きる。自分を確信し、対照的な思想体系にある現実を把握できない。

(2) 二郎

身なりにうるさく、家でもネクタイ、ワイシャツ姿だ。ネクタイ一本にこだわる。いつ

も前かがみになる。

エレクトロニクス（多分三菱電機）の会社に勤めている。仕事に打ちこんでいて同僚に暴君と呼ばれている。家では悦子にこまごま命令する。亭主関白だ。悦子とはお茶を入れたりとか黒ネクタイをどうしたという話くらいしかない。二人の間に会話らしい会話はない。二郎は言わず、悦子は言おうとしても呑み込んでしまう。

昇進の話も主に緒方として、直接悦子に託すことはない。新聞を読むのが主な行動で緒方に誘われ将棋をさすかだ。将棋にもあまり乗り気ではない。帰宅して何をしているのか。

仕事はでき、上役には目をかけられ出世し今も昇進の機会がある。緒方の現状批判に、制度にも欠陥はあった。神の国で最悪の民族だったと批判もする。家族のため一所懸命働いた。誠実な人だった。景子と暮した七年間にはいい父だった。

将棋で最初の作戦が挫折するとすぐ投げ出す。九才の時からそうだ。思い通りにならないと手がつけられなくなる。

緒方は松田に手紙を出したか聞いた。まだだと答える。あの論文が出て、二、三週間たっている。二郎は嫌い、あいまいにすます。緒方が福岡に帰って何もなかったことになるのを待っていた。緒方はこの態度を見抜いていた。厄介な問題が起こると決まって使う手だ。何年か後に訪れた危機の時にも同じ対応をし、悦子は長崎を離れた。問題を解決しようとしな。状態を放置し時がたってあいまいになるのを待っている。主体的自立的な態度をとろうとしな。それができた。あいまいなまま温存しておき、解決しようとしな。責任をとろうとしな。

緒方が家にいることに不満はないと思っている。連れ出す気も暇もない。困った時に来た。迷惑な話だと快く思っていない。仕事のことで頭は一杯で悦子のことも緒方のことも頭にない。

将棋の決着をつけようと何度も迫るが、のらりくらりと対戦を避ける。さし方に生き方

がでている。結論を出さない出せない態度を悦子も見抜いている。

この家庭で育った景子は閉じこもりになる。二郎は過労死する。

(3) 緒方悦子

調理、菓子作り、縫物ができ家事万端をこなす。二郎、緒方に気を使う。良妻だ。ヴァイオリンも弾ける。細かなところに目が行き届く。繊細なことにも注意を払う。繊細な感覚の持ち主だ。

長崎の緒方の家は大きな家だった。悦子は門の所につつじのある家を望み、緒方はつつじを植えた。緒方と二郎が住んでいた。そこに入った。その家でヴァイオリンを弾いた。悦子が両親といた家はその近くにあった。松田の家も藤原の家も近くにあった。

二郎と悦子は結婚し、アパートに入り緒方は一人になった。会社の社宅で同じつくりの一住宅だった。緒方は一人になり、大きな家だったので故郷の福岡に移った。

悦子は緒方の教え子だった。二郎より長い付き合いになる。中村との縁談が壊れ緒方が引き止め救われた。その後、二郎と知り合い結婚した。

緒方は社会的で多くの人に接し、悦子とも話があった。緒方は目をかけ手助けし可愛かった。二郎は関心のある話しかしない。二人の間に会話は少ない、話し合うようなこともなかった。二郎は問題を放置しておくので悦子は見放した。仲の良いのは義父と嫁で二郎は自然に孤立していった。

緒方と二郎が松田の話をする、緒方を長崎には覚えている人がたくさんいる。地位の高い人には批判はある。松田は恩知らずだと緒方の肩を持つ。緒方に寄り添った意見を述べる。緒方と松田が口論すると、下らないことを言う、見下げた話だと松田を批判する。二人の言っていることは理解していない。緒方の見方をする。

緒方を父のように思い慕っている。対立する松田を批判する。身内を守る姿勢が明らかだ。悦子は思想的に考えることはできない。心情的に近い人に味方する。

出かける緒方に弁当を作る。二郎の来客に作った菓子を出す。緒方の亡妻の名景子は良い名と子につけたいと言う。胎児は景子とつけられる。また、誠二はしゃれた名で男の子につけたいと言う。昔は緒方を父のように思っていたとまで言う。二人は心から通じあう。ヴァイオリンを下ろし、悦子に弾いてくれと頼む。昔を思い出し、あの雰囲気になろうとする。緒方とのやりとりは恋人同士のような。本来は二郎との間にあるべき関係だ。

二郎は悦子に指示する。悦子の言うことに耳を貸さない。昇進の祝いの盃も悦子抜きで行う。悦子は松田重夫について二郎に洗いざらい言ってやりたい、父親に対する態度ははっきりすべきだと思うが何も言わずじまいだ。夫婦の間柄は口にだして話し合うようなものではなかった。満足できるものではなかった。二人の家庭生活は離反している。悦子は他人との交渉はうまくやるが、意見を持った生き方はしていない。

悦子は社宅に友達がいらない。窓から木造の家を見、そこに住む佐知子と知り合う。娘の万里子が喧嘩したこと、学校へ行っていないことを報せる。川は危ないと注意する。生活が大変そうなので知り合いのうどん屋で働くことを持ちかける。佐知子は万里子とうどん屋で働く。佐知子が万里子がいなくなったと話すを探しに行く。

アメリカへ行くと言う話に万里子のことを心配する。お金が必要だと言うと自分の通帳を渡す。自分名義の通帳を持っている。結婚すれば男の姓に変わり、資産もすべて男のものになる時代に悦子は自分の資産を持っている。投票も二郎と別の政党だったかもしれない。

外出する時に、二、三時間万里子を預かる。万里子は悦子の注意を聞き入れない。伯父の帰って来てもいいと言う手紙に大喜びする。が、引っ越しの準備もせず返事も出していない。不審に思う。従姉との仲を心配しても仲が良かったと答える。

稲佐山へ遊びに行き、万里子に双眼鏡を買ってやる。佐知子はアメリカ婦人と英語で話す。稲佐から帰るとアメリカへ行くとは今度は片付けを始める。

悦子にとってただ一人の友達佐知子と娘に尽くす。娘に注意し気を使い母に不安を述べて手を出してやる。何から何まで親身にやってやる。ここまでするかと思われる程してやる。家族の延長に佐知子母娘はある。悦子の人に対する思いやりがここにはある。

悦子はお人よしだ。二人に受け入れられるように対応する。悦子は親切だ。困った人に助けてやることができることはしてやる。損得を考えず、自然に思うようにしてやる。善良な悦子に自我はない。人に、状況に合わせて行動する。主張も誘いもない。

高校で近くの緒方に教わる。好感を持たれ交際は続く。中山との話がこじれると緒方がかばう。息子の二郎と結婚する。社宅で友達ができず、近くの佐知子と知り合い助言や手助けをしてやる。孤立をまぬかれる。二人の娘を育てる。あるがままに人生を歩む。日常を平穏に生きる。自分の身に何が起ころうと、その人柄で人を呼び人に慕われ人を手がかりに生きる。

(4) 景子

二郎と悦子の娘だ。ミセス・ウォーターズから何年もピアノを習っていた。二郎の葬式にも帰ってこなかった。家庭生活に入ってこようとしなかった。二、三年間閉じこもり、家族を閉め出した。友人は一人もいない。洗濯物を取りに降りて来て閉じこもった。気紛れを起こして降りて来ると、ニキカ二郎と喧嘩になった。

六年前家を出た。悦子はずなかりが切れる、一人ではやって行けないと激しく反対した。守ってやりたかった。

マンチェスターの部屋で首つり自殺をした。死後数日して家主の婦人に発見された。景子の性格は親族譲りだった。二人の娘は似ていた。癩癩持ちで執着心が強く、怒り出すとおさまらず一日中機嫌が悪かった。

二郎と悦子のジレンマの中、景子は閉じこもりになり自殺した。二郎は会社員として働いた。外では上手く生きた。夫婦に問題があり景子は外に出ることができなくなりとしこ

もった。万里子と接し胎児の育て方を考えただろうがうまくいかなかった。

(5) ニキ

ロンドンにいる。優しいところがあり、悦子が選んだ道を後悔することはないと言いに来た。来たのも使命感だ。

十九歳の友達が赤ん坊を生んだ。結婚していない、欲しくて生んだと話す。子供は嫌いでいるのが嫌だと言う。ピアノを教わった先生の悪口を平気で言う。

景子を非難し、その部屋を不気味に感じる。悦子に結婚や年齢のことばかり気にするなと言う。結婚して子供が生まれてという生活を否定し、やれることをやると言う。

父はイギリス人の新聞記者だ。ニキは父の書いた記事を取り出してできるだけ読む。そのことで自己同一性を確立することができる。友人ディヴィットはロンドン大で政治を学んでいる。

悦子のしたことを正しかったと肯定する。父の仕事の跡を辿る。自分を確立して行く。

一概には言えないが、二人の父の違いが二人の異なる娘にした。

(6) 佐知子

三十九才で東京言葉を使う。東京から長崎にやって来た。十九の娘万里子がいる。

悦子に声をかけられ親しくなり、信頼し頼る。万里子が喧嘩をしていたと知らされても気にしない。川の方は危ない、ずる休みしていると忠告しても親切だと礼を言い、立派な母になると言う。妊娠中の悦子が母娘を見て子育てに精を出すと思う。が、悦子はそうでもなかった。万里子は大きな猫をなでていた。子猫が生まれると言う。子猫と胎児がつながる。東京から連れてきた猫だ。長崎に来て一年、街の反対側の伯父の所に同居していた。金に困り悦子に無心する。働くところを紹介してもらいに悦子の知人のうどん屋で働く。

高級茶碗を使い、みすばらしい家において金の無心をする佐知子に悦子は異様な印象を受ける。伯父の所から盗んできたと言う。伯父はとても立派な家に住んでいる。そこから金

目の物を持ち出す。

うどん屋で万里子は客に失礼なことを言う。佐知子に叱られるが聞いていない。万里子がいなくなりアパートの悦子の所に探しに来る。二人で探しに出る。アメリカへ行くと言うので驚く。見つからず一旦家に戻る。再び出て向こう岸に行く。万里子は土手の下手に横に倒れている。三人は家に戻る。

悦子の方が心配し真剣だ。佐知子は大したことではないと言う。慣れている。母娘の関係は出る方も探す方も淡白だ。

悦子はケガを警察に連絡すること、女の人のことが気になるが答えは〇つけない。

アメリカ行きを心配する。英語が話せる〇英語で話しているから心配いらないと答える。アメリカには学校があり、万里子は頭がいいと答える。学校ではできる子とつきあい、家庭教師もほめていたと自慢する。

戦争がなくて夫がいきていたら家柄にふさわしい生活ができた。引っ越しばかりしていたと言う。多分夫は軍人で転勤が多く転勤を繰り返していただろう。夫は戦死したのだらう。

そして伯父の家に厄介になった。フランクが車で迎えに来る。うどん屋がなくてもよくなる。

フランクはホテルからいなくなる。伝言も何もない。彼らは東京で知り合った。東京でも同じことがあった。東京から長崎まで来てくれた。アメリカへ連れていきたいと思っている。同じことを二度したら三度目もある。子供のような人に生活はありえない。佐知子はフランクを愛し頼りにするがフランクを理解している。

探しに行こうと万里子を預け金を借りて出かける。佐知子も子供みたいなところがある。

フランクの日本語はひどく、二人は英語で話す。父は英語が上手でヨーロッパに親戚がいる。佐知子は英語を勉強した。結婚すると夫にやめさせられた。敵の言葉英語は禁止語

だ。得意な英語は使えなくなる。

戦中、長崎はひどかった。東京もひどかった。毎週毎回悲惨なものを見続けた。長崎原爆投下、東京大空襲とさんざんな目にあった。

敗戦の頃、防空壕や焼跡のビルで暮らした。そこでも悲惨な経験をした。佐知子はアメリカ兵フランクと知り合う。万里子は五つか六つだった。あんな時結婚したと後悔する。が、戦争がどんなものか分かっていた人は一人もいなかった。名家に嫁いだが戦争でこんなに変わるとは思わなかった。

万里子に子猫を飼ってと頼まれ悦子が断ると万里子は飛び出す。帰って来た佐知子は尻をしたたかにぶった。万里子はそれでも謝らなかった。佐知子は言い聞かせることができない。万里子は再び飛び出した。佐知子は茶を入れる手を休めず顔を上げずにフランクは見つけたと言う。伯父が承知するかしないか話しあってみよう。万里子もアメリカでは不安と思うだろう。

前にフランクは、ホテルにメイドまでして稼いだ金を三日で全部飲んでしまった。あと二、三週間でアメリカへ行けると言うのに。今度もまた同じバーの女と一緒にだ。

伯父から帰って来てもいいという手紙が来る。佐知子は大喜びする。万里子を放っておくことも少なくなる。

万里子には話していない。引越しの準備もしていない。伯父への返事もしていない。佐知子は戻る決断ができない。

伯父は夫の親戚で血のつながりはない。数か月前まで会ったこともない。裕福でとてつもなく大きい方にいる。佐知子と同年で未婚の娘と女中と暮している。

あらゆる面で伯父の所へ戻るのが一番だ。悦子は越す前に一日旅行に誘う。稲佐山のケーブルカーに乗って帰って来る。そこでアメリカ婦人と日本婦人とその子の三人連れに会う。佐知子はアメリカ婦人と流暢な英語で話す。

アメリカ婦人に会ってから、佐知子は様子がおかしくなる。口数が少なく沈んでいる。おさえられて来たアメリカ志向がよみがえって伯父の家へ行こうと迷っていたが、アメリカへ行こうと思う。伯父の家では生活は保障され万里子が猫を飼うこともできる。が、佐知子にすることは何もない。メイドやうどん屋のパートのようなことをする以外ない。アメリカへいけば生活の不安フランクの不安はあるが、日常的に英語を使うことができる。英語を使う仕事もできるかも知れない。抑圧されて来た英語への思いを爆発させることができる。

父は尊敬されていたが、外国人の親戚があるというので縁談まで壊れかけた。父は英語を勉強すれば仕事を持った女になれると言った。英語を勉強するのは好きだった。小さい時アメリカへ行く夢を見ていた。

軍国主義の時代、英語は禁止とされていた。使えず使えば冷遇された。夫は英語の勉強を禁じ、本も捨てさせられた。厳格な愛国主義者で思いやりがなかった。名門の出だった。英語の勉強を禁じられたても何も言えなかった。男尊女卑で男は絶対者だった。

佐知子の抑圧さらたきた自我は戦後一気に登場する。東京で軍人フランクと知り合いアメリカへ行く希望を持つ。フランクと堂々と英語で話す。稲佐山でアメリカの婦人と語る。

うどん屋の藤原が将来に希望を持たなくてはいけないと言っていると悦子に聞き、自分も戦争でめっちゃめっちゃになったが、娘がいる将来に希望を持たなくてはならないと言う。

佐知子は今度は荷造りをする。朝発つ、神戸へ行くと言う。神戸からアメリカへ行く。フランクが手配した。今度は彼も裏切らない。明日の朝車でやって来ると言う。

伯父の家にいこうとした時は猫を連れて行くと言ったが、今回は連れて行けなくなる。万里子は逆らうが、箱に猫を入れて川に流す。万里子の望みを断つ。強い態度で拒否したのは初めてだ。

フランクには友達が幾人もいて、アメリカの基地がある。貨物船の仕事があってアメリカへ行く、お金を送ってくれてアメリカへ行ける。彼が全部手配してくれた。神戸では住む家を見つけた。船にも運賃の半額で乗ることができる。ここを離れるのが嬉しい。万里子も行った方が幸せになる。

戦争で家を夫を英語を奪われた。悲惨な生活に耐え、自力で生きる道を探し求めた。磁器を盗みアルバイトをし金を借りて生活を維持しようとした。伯父や悦子や藤原の助けを受けた。そして、生活を立ち上げようとした。国を変え、マイケル、万里子と暮す。戦争で失ったものを敗戦後の生活で取り戻そうとする。これからの生活に不安はあるが、将来に向けて歩こうとする。

伯父の家に入って安定した生活をするかも知れないのは悦子だ。悦子は伯父の家に入っても上手くやっていく。

(7) 万里子

十才の女の子だ。初めて見る相手に猜疑の目を向ける。用心深くじっと見る。緑の服に髪は短い。学校へは行っていない。子猫が生まれる大きい猫を撫でている。生まれる子猫をもらってくれる人を探す。

人がいても背中を向けて寝そべっている。連れ出そうとした女がいると話す。

佐知子とうどん屋にいる。客に言ってはいけないことを言って藤原に注意される。自分がどこにいてどう行動したらよいか分かっていない。声をかけられても応答したくないと手を見ている。

一人家にいるのがつまらなくなると黙って外に出て行く。悦子と佐知子が探しに行くと何か転がっているようにしている。

家で蜘蛛をにらむ。昔飼っていた猫が蜘蛛をとった。一人子猫と遊んでいる。友達はいない。転校が多く友達もできにくい。部屋にいと外へ行きたがる。がらんとした家の一

人子供はいられない。何も無いここにいないで外へ出ようとする。外には何かあるかも知れない。

蜘蛛の足を一本つかむと掌にはこんだ。手でふたをした。両手でくるんで悦子の前に立った。両手が離れ後の暗がりに消えた。悦子は蜘蛛を汚いと言う。ハエなら汚いと言っても蜘蛛では気味悪いというところだ。

子猫を悦子にもらってくれるか聞くと断られる。立ち上がって闇の中へ駆け出して行った。

佐知子が帰って来ると、どうしていつも出かけるの、どうしてフランクの所へ行くのと逆らう。佐知子は脅かすように手を振り上げたままじまじ万里子を見た。注意してしつけをするところで口では言ってもいい聞かせることはできない。中途半端だ。母と娘はあいまいな間柄にいる。フランクなんか豚のおしっこと言って闇の中に消えた。言うことを聞き入れられないと感情をおさえられなくなり夜でも外へ駆け出す。鬱憤を解消できないと外に出る。外へ出ても危ないと無謀なことはしない。何度出ても一人帰って来るか迎えに来られて来る。感情的な行動に出ず冷静に対応する。

十才で小学校五、六年生だ。学校に行かず家にいる。手続きをしていないか行かせないかだ。

万里子は稲佐山へ行った時、人、九才の男の子と知り合う。双眼鏡を貸してやる。見えない、自分のとじゃ比べ物にならないと文句を言う。高価な双眼鏡を自慢する。

スケッチブックに絵を描いていると身を乗り出しての覗きこむ。男の子は船は大き過ぎると批判する。先生について絵を習っている。九九を習っていると自慢する。将来三菱の社長になると決めていると言うと万里子は父は動物園の園長をと答える。ふくれっ面をしてベンチに腰かける。

万里子が木に登ると木の幹に足をかえようとして落ちて悲鳴を上げる。

父が一流企業に勤める子は、家庭教師につき成績優秀だ。が、一連の活動は万里子に全て劣る。万里子はともかく一人で活動し、一人でできるようになった。男の子は大人の中で指示通りに活動している。その中で決まった行動しかとることができない。

一人放っておかれ淋しい思いをして来た万里子は一人でできる子になっていた。大人といて大人の事を知っている。

友達との交流がなかったが、男の子を介して自分に目覚め自ら行動していくようになる。

クジを三回引いて一等賞をあてる。東京でも一等があたった。あてようとして引けばくじもあたる。子猫のためにバスケットをあてようとしたが木箱をあてた。これを子猫の家にする。猫のこと考えている。伯父の家では子猫を飼えるのでそうしようとした。フランクとアメリカへ渡るとできない。

佐知子は猫を箱に入れて流す。万里子は何メートルか走って流れつく箱を見ていた。五十メートル先まで行って川を見ていた。猫が流され殺され悲しむ。が、ダダをこねず、事態を受け入れる。何度も頼んだ、飼うと約束したと何度も言った。が、拒否されあきらめる。アメリカへは行きたくない。フランクも嫌いだ、が、これはもっとどうにもなくない。強制される状況に身を任せる。

(8) 藤原

悦子の母の親友の一人で髪も白くなりかけている。心暖かい人だ。悦子に頼まれた佐知子を雇う。繁華街に店はあった。

悦子のお腹にさわって大事にするようにと言う。幸せになることだけ考える、赤ちゃんの将来のことだけ考えると言う。万里子に佐知子に口のきき方を教えてもらうように言う。

和夫の話をしていてよく顔を曇らせる。婚約期間が長いのはよくないと言う。道子とのことは三年かかって壊れた。緒方が修一の学校の校長をしていた頃を思い出す。修一は緒方を恐がっていた。和夫は二度としないと言っていたが、将来のことを考えるようになって

た。相手はいたい希望を持とうとしている人生はまだまだこれからだ。

洗濯機の話聞いて驚く。日本の手があるのになぜ必要か。世の中はまるで変わった。藤原と緒方は息子を自慢する。

緒方は何もかも変わってしまったと言う。これは一言で変動を把握している。事例の意味や本質を捉えず捉えられず変動を率直に言い表す。このように時代は変遷して行く。

藤原の夫は偉い人だった。今妻がうどん屋をやっている。言ったら気まずい思いをさせる、恥をかかせると緒方が言う。昔の地位を持ち出して今の生活を差別する。悦子はうどん屋を恥ずかしいとは思っていない。仕事できて喜んでいると言う。緒方は身分、地位職業で人を差別する封建主義だ。

藤原は今の生活を大切にしている。誇りを持って仕事をする。何があっても希望をもち前に進もうとしている和夫も未来に向けて生きている。

参考

問もなく占領が終わる

1946年～1952年

普通選挙

1946年4月

朝鮮戦争

1950年～1953年

長崎原爆投下

1945年8月9日

『遠い山なみの光』

遠い山なみは人生を、光は希望を象徴している。残酷な人生をわずかな希望でも望みを

持って生き続けることを表している。

1982年